

ドイツにおける移民児童生徒教育と進路選択に影響する要素 ードイツの2人の移民青年へのインタビューからー

山本 美帆 (東京学芸大学大学院教育学研究科 院生)

1. 研究目的

日本国内でも多様化している外国人生徒の進路選択の決定要素の検討多くの示唆が得られると考え、ドイツの移民青年の進路選択事例を扱う本研究を行った。

ドイツは全人口の 19.5%を移民が占める世界第三位の移民国である(2011年)。現在は移民との共生を目指しているものの、移民の子ども達の進路選択にはドイツ人の子どもとは異なる政治的、宗教的、制度的要素が影響を及ぼしている。

2. 先行研究

2.1 ドイツの移民の現状

ドイツの移民の歴史は 1955 年に外国人労働者を受け入れたことに始まる。木戸(2006)によると、ドイツには①EU 加盟国出身者、②非 EU 加盟国出身者、③庇護申請者、④難民・不法入国・滞在者、⑤ドイツ系帰還者の 5 タイプの移民が暮らしている。この中でもイタリア、ギリシャなど EU 加盟国出身者やドイツ系帰還者は優遇されている。国内最大グループのトルコ出身者は大都市にエスニックマイノリティを形成し、ドイツ社会とは一線を画している。仕事面では低賃金の職に就く者が多く、不況時には解雇の対象ともなりやすい。このため、失業率が高く、生活保護受給者も多くいる。2001年のアメリカ同時多発テロ以降は、特にイスラムへの警戒が強まるなどドイツ人からの差別も受けている。

2.2 ドイツの移民の教育

ドイツの教育は国内在住の全ての満 6 歳以上

の子どもを対象としている。しかし、移民の子ども達は不安定な生活やドイツ語力不足などにより、就職を目的とした基幹学校への進学が最も多い。また、2000 年に行われた PISA 調査の結果から、移民の子どもたちの低学力が明らかになった。

3. 研究方法

本研究は①文献調査と②メールや SNS によるインタビューの 2 つの方法により行った。

3.1 インタビュー調査について

3.1.1 インタビュー協力者

協力者は、東欧や旧ソ連出身者を中心とし、戦争などを逃れた③タイプの庇護申請者である D と、戦前に旧ソ連等で強制移住させられるなどしていたドイツ系住民で、移民として優遇される⑤タイプのドイツ系帰還者である K である。表 1 にインタビュー協力者のプロフィールを示すが、ドイツ国内に暮らす移民はタイプごとに様々な問題を抱えている。2 人とも筆者のドイツ留学時代からの友人で帰国後もメールや直接会う等交流が続いている。

表 1. インタビュー協力者

	移民タイプ	年齢	出生地	国籍	家庭内言語	宗教	現在
D	庇護申請者	22 歳	ドイツ	独 レバ ン	アラ ビア 語	イス ラム 教	専業 主婦
K	ドイツ系帰還者	21 歳	カザ フス タン	独	独、 露	キリ スト 教	学生 (専門 学校)

3.1.2 インタビュー方法

インタビューは3段階に分けて次のような内容について尋ねた。

- ①本人の言語や宗教、現況、移住経緯などの基本的な情報 (メール・SNS)
- ②家族の基本的状況及び進路選択 (小4、高校卒業時) に関わる教育歴や友人関係、母国との関係やアイデンティティーに関して (質問用紙を送付)
- ③②を受けてさらに詳しく訊きたいと思った将来のことや社会との関わり、教育歴など (メール・SNS)

3.1.3 分析の方法

の手順でインタビューデータを分析した。

- ①2人に共通する回答を比較し、共通点と相違点を抽出。
- ②①から進路選択に影響していると考えられる要素を抽出した (8要素)。
- ③抽出した要素別に進路選択について考察

4. 分析結果と考察

4.1 インタビューから明らかになった要素

進路選択に影響する要素として両親、兄弟・祖父母、友人・教師、言語、ドイツへの移住、母国との関わり、周辺社会との関係、宗教の8要素が浮かび上がった。特に両親や宗教の影響が大きいことが明らかになった。

4.2 家族による影響

両親の教育への意識がD,Kともに高く、進路選択に大きな影響があった。しかし、できれば進学を目指すという両親の共通した意識を形成している背景は異なっていた。

<Dの場合>

内戦中に母国レバノンで大学まで卒業した母が、大学進学資格が与えられるギムナジウム進学を強く希望した。また、父親及び3人の兄も全員大学を卒業している。ドイツの教育に困難

を抱えた上、伝統的に教師に教育を一任するムスリムの家庭でありながら、Dが大学進学を目指すギムナジウムを卒業したことには、Dの家庭のそれまでの教育の高さが教育への意識の高さに結びついている。

<Kの場合>

Kの両親は、良い職を得るためのプロセスとして教育を重要視している。Dが大学ではなく、専門学校で教育を受けていることにも大きな影響を及ぼしていると考えられる。

4.3 宗教による影響

宗教についてはドイツ国内では少数派のイスラム教徒であるDに大きく見られる。Dは教師や友人と良い関係を築くことができたことから、ドイツでの生活への満足感を感じている。しかし同時に被差別経験や宗教を理由とした度重なる引っ越しなどからドイツへの距離感を感じている。大学へ進学せずに専業主婦になったことには宗教が大きく影響しており、レバノンにおける教育の意味などレバノンの文化も強く継承したと言える。

5. 子どもの日本語教育への貢献

以上のように進路選択には様々な要素が影響しているが、家族の意識の影響は大きい。その意識の背景は表面的に共通しているものの、深く見てみると違いが見られた。このことは、今後日本の外国人生徒の進路選択を考える際に重要であることが示唆される。

【引用文献】

木戸裕 (2006) 「ドイツの外国人問題—教育の視点から—」『レファレンス』第56号 pp.59～pp.83